

被爆体験風化させない 市認定「伝承者」ら活動

「『行ってきます』が、最後に聞いた妹の言葉だった」

「青白い光に、どーんという大きな音」「手袋が裏返しになるようにめくり上がった皮膚」。8月5日、平和記念資料館での定時講話で、全身全霊を傾けて語られる広島と長崎のきょうだいの被爆体験に、ピアノの音色が流れる会場からはすすり泣く声が漏れ

8・6を つなぐ

広島原爆の日

本紙記者報告④

た。

体験談を語ったのは広島市安佐南区のピアノ奏者、沖西慶子さん(51)。被爆者の高齢化が進む中、市が認定する被爆体験伝承者の一人として、自分ではない「他人」の体験を伝える活動を続けている。

この日語ったのは「2組のお兄さんと妹さんのお話」。学校の平和学習で長野県から訪れた中学生黒紐七海さん(15)は「すぐく生々しくて、自分に置き換えて考えるのもつらかったけど、伝えていくことが大切だと思った」と話した。

資料館での定時講話や団体などの依頼に応じて講話を行う伝承者。広島市が2012年度から養成事業をスタートし、受講生は講話実習などの

3年間のプログラムを受けて、自身で選んだ被爆者の証言を語り継いでいく。今年7月時点の認定者は74人で、受講者数は221人だ。

17歳のときに爆心地から3キロの自宅で被爆した竹岡智佐子さん(88)は「100年も200年もつなげていってほしい」と、プログラムで受講者に体験談を伝える。自身の体験を振り返り「ただ、怖い、恐ろしいと言っただけでは意味がない」と助言。「死体を食べるドブネズミ、人間を焼く臭い。思い出したくないことほど、皆さんに知ってほしい」と語気を強めた。

竹岡さんの長女で伝承者1期生の東野真里子さん(64)は、母に誘われ

て受講するまで被爆体験を詳細に聞いたことはなかった。

「自分の体験ではないので、どれくらい伝わるか不安だった」というが、鮮明に残る母の記憶を風化させることなく後世に残そうと、母の言葉を語り継ぐことを決意。「人間がみんな真っ黒焦げ、頭からズルズルの大やけど」などと当時の凄惨(せいさん)な状況を講話の原稿にありのまま書き込んだ。

「人と人で目を合わせて話したことはきつと心に残るはず」。東野さんは伝承事業の意義を語り「戦争をしてはいけない、原子爆弾を使ってはいけない」ということを伝えていきたい」と力を込めた。

(伊藤愛)



定時講話で伝承者として被爆体験を語る沖西慶子さん(左)
＝8月上旬、広島市中区の広島平和記念資料館